

Title	都市社会学の多系的発展：都市社会学100年史
Sub Title	The multi-linear development of urban sociology 100 years of urban sociology
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.54 (2002.), p.23- 39
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000054-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

都市社会学の多系的発展

—都市社会学 100 年史—

The Multi-linear Development of Urban Sociology

100 Years of Urban Sociology

藤 田 弘 夫*

Hiroo Fujita

Recently, the study of Social Science is changing a great deal. At the same time, it is losing its glory of the old days. A. Giddens and I. Wallerstein have suggested, concerning this point, that the Social Science lies too deeply in the tradition of 19th Century. Truly, the present Social Science has been formed in the period between the end of the 19th Century and the first half of 20th Century and the Urban Sociology is no exception. However, the Urban Sociology is changing enormously these days: moreover, the relationship between the science and the society is about to change fundamentally.

The origin of the Urban Sociology is sought to 80 years ago, the study of Park and Burgess; this view is also shared by the scholar under the influence of Chicago School. In this article, however, the origin is sought to even 20 years earlier than the traditional view, and to the study of Geddes; Geddes had also had a strong impact on Chicago School before Park. It is true that the Urban Sociology cannot be sought in one origin: the various factors affect in a complex way in the development of the Urban Sociology, and it is not easy to discuss. But here, through following the diverse development of the Urban Sociology over a century, I would like to include in my viewpoint the various points, which have been regarded as unimportant by the Chicago School. I hope this will help in rethinking, not only the study of Urban Sociology, but also of the dramatically changing Sociology and the Social Science.

はじめに

最近、社会科学の研究は大きく変貌しようとしている。その一方で、社会科学は昔日の輝きを失いつつある。これに関連して、A. ギデンズやI. ウォーラースティンは、社会科学があまりにも19世紀的伝統のなかにあることを指摘した。たしかに現在の社会科学の研究は19世紀末から20世紀前半に形成されたものである。このことは、都市社会学として例外ではない。しかし都市社会学の研究は近年大きく変化している。それどころか、学問と社会との関係が根底から変化しようとしている。

都市社会学の起源は約80年前のパークやバージェス

の研究にもとめられている。これはシカゴ学派の見解でもある。本稿では都市社会学の起源を従来の見解を20年ほどさかのぼり、ゲデスの研究に起源をもとめる。シカゴもパーク以前にはゲデスの強い影響を受けていた。もちろん都市社会学の源泉をひとつに帰することはできない。都市社会学の発展には多様な要因が複雑に作用しているのであって、簡単に論じることができない。しかしここでは、都市社会学の約1世紀にわたる多系的な発展をたどりながら、従来のシカゴ学派を中心とした研究では等閑に付されてきたさまざまな知見を視野に収めたい。このことによって、都市社会学のみならず、近年急激に変化している社会学や社会科学の研究を改めて考える一助となれればと願う。

* 慶應義塾大学文学部教授
(都市社会学)

第 1 節 社会学と都市研究

【社会学と社会調査の黎明】

社会学は伝統社会の解体と近代の強化にかかわって形成されてきた。社会学はすぐれて近代社会の学問である。しかし社会学の起源をどこに認めるのかは、多分に社会学観の問題である。社会学史家のなかにはアリストテレスやイブン・ハルドゥーン¹⁾の著作に、最初の社会学を認めようとする人たちが少数ながら存在している。社会学の起源をめぐる議論は多様である。とはいえ、現代の社会学はあくまで 20 世紀の産物である。だが、社会学は A. ギデンズの主張するように 18 世紀後半から 19 世紀になると、20 世紀に展開される内容を実質的にも方法論的にももっていたのである (Giddens; 1987=1998: 28)。

ここで気をつけなければならないのは、ヨーロッパの新しい知識がアカデミーやサロン、サークルにあったのであり、大学にあったのではないということである。ドイツの大学の一部に新しい動きがみられたが、大学は伝統的知識を教えるたんなる教育機関でしかなく長い間沈滞していた (加藤; 2001: 151)。大学がドイツを嚆矢として学問の中心となるのは 19 世紀末になってからである (Collins; 1994=1997: 20)。したがって、新しい学問が生み出されていったのは、新しい問題に正面から向き合う場面においてであった。

フランスでは大革命後の長い政治の混乱と産業化の進展による社会の流動化によって、新しい秩序の必要性がもたらされていた。こうしたなかで、社会学はオーギュスト・コント (August Comte) によって、社会再組織のプランとして提唱された。コントの提唱した実証主義 (positivism) はただ単に知識に関する理論ではなく、何よりも歴史の概要であり、社会改革の計画でもあった。コントに触発されてイギリスでも、ミル (John Stuart Mill)、ヤスペンサー (Herbert Spencer) などの社会学が発表されていた。とくにスペンサーの「社会進化論」はアメリカ、日本、中国など世界中に大きな影響を与えた。都市の生活者は産業化が進展するにつれ増大する。都市には豊かな資本家と貧しい労働者が急増していった。都市住民の貧富の差が拡大するとともに対立が激化するようになる。そこで対立を緩和するために、労働条件の決定になんらかの基準を与えようとする調査が行われるようになる。

ル・プレー (P. G. F. Le Play) は 1855 年、厳密な観察

と調査にもとづく『ヨーロッパの労働者』を発表し高い評価をえる。かれの研究方法はル・プレー方式として大きな影響を与えるようになる。ドイツは領邦国家に分かれていた。そこでは、法哲学と記述統計が領邦国家経営のために発達していた。1855 年には第 1 回の国際統計会議が開催される。これをもとに 1857 年、ドイツのザクセンの統計局長エンゲル (C. L. E. Engel) が、ベルギーの労働者の家計構造の分析から、家族が貧乏であればあるほど、総支出に占める飲食物の購入比率が高くなることを発見する。これは貧困を示す「エンゲルの法則」として知られるようになる。

イギリスはもっとも産業化が進んでいた。実証主義運動はイギリスにおいても、科学的であると同時に自由思想的、そして急進主義的運動になった。しかし実証主義の運動は社会変革にあまりにも深くかかわりすぎたので、科学的 (scientific) な側面をないがしろにされると非難されるありさまだった²⁾。もっともイギリスでは、社会学の名は社会主義 (Socialism)、社会科学 (Social Science)、社会の科学 (The Science of Society) と互換的に使われていた。両者の境は流動的であった。

民衆の慢性的な大量失業や窮乏化問題は、資本家にとっても深刻であった。それは資本主義のアキレス腱となっていた。このため労働者生活の病態と救済策を求めてさまざまな社会調査が実施されるようになる。メヒュー (Henry Mayhew) は、1850 年代にロンドンでインタビュー調査を行っている。ブース (Charles Booth) は、ロンドンの労働者の生活の大規模な調査を行いその成果を 1887 年から 1903 年まで断続的に発表した。また、ヨーク市の資本家ロウントリー (B. Seebohm Rowntree) が、1901 年に「貧乏線」を設定する。イギリスにおいて、さまざまな都市思想のなかから、都市を社会的にとらえようとする動きがでてきた。ビクトリア時代には社会調査が実施された。さらに、それらの調査が A. L. ボーリーの調査へと発展していくのである (Bowley; 1915: 1925=2001)。

【P. ゲデスと都市社会学の誕生】

そうしたなかで、パトリック・ゲデス (Patrick Geddes) は都市を社会的にとらえようとした。スコットランドに生まれたゲデスは進化論者トーマス・ハクスレーのもとで生物学を学んだ後、コントの社会学やル・プレーの社会調査を学んだ。かれの知識と経験は恐ろしいほど広範に及ぶが、30 代後半以降はもっぱら都市研究を中心に活動している。かれはデュルケームなど大陸

の社会学の影響を受けるとともに、社会調査の意義を強調した。ゲデスは1880年代にエディンバラに移り住み旧市街の再開発に取り組む。かれは1890年、エディンバラの中心に展望塔 (Outlook Tower) を手に入れるとともに、そこに地域博物館 (Regional Museum) と社会学の実験室 (Sociological Laboratory) を設置した。

展望塔は学校、会議場、出版社、クラブとなり、ドイツの進化主義者 E. ヘッケルやフランスの地理学者 E. レクルスなど高名な学者がヨーロッパ各地から次々とやってきた。アメリカからもハーヴァードのウィリアム・ジェームズ、シカゴのチャールズ・ズェブリン (Charles Zueblin)、ミシガンの哲学者ウェンリー (R. M. Wenley) などがやってきた (Mairet; 1947: 64)。かれは急激に成長するエディンバラが世界中でもっとも勉強になる実験室であるとして、繰り返し都市調査に取り組んだ。かれは展望塔で数多くの都市計画を手がけ、そこはまさに「世界最初の社会学の実験室」(The World's First Sociological Laboratory) と呼ぶにふさわしいところであった (Zueblin; 1899)。



エディンバラのロイヤルマイルにある「世界最初の社会学の実験室」手前から右手にバトリック・ゲデス通り (steps) が続いている。

ゲデスは1900年に、ニューヨーク、フィラデルフィア、シカゴなどを旅している。とくにシカゴの訪問はこの旅行の頂点であった。そこで、かれはジェーン・アダムズ (Jane Adams) と会っている。かれはハル・ハウスにしばらく住み込んだ。それは、J. アダムズとの長い友情のはじまりだった。ゲデスは彼女をシカゴの女大修道院長 (The Abess of Chicago) と呼んだ。ゲデスは、ジョン・デューイと会いかれの実験的な学校を訪問している。かれはまた、エディンバラのサマー・ミーティングの出席者であるズェブリンと再会している。ズェブリンは前年に出版された T. ヴェヴレンの『有閑階級の理論』にたく興味を魅かれていた (Kitchen; 1975: 186)。

ゲデスは1900年以降、活躍の舞台をロンドンに移している。そして1903年には、ロンドンでブランフォード (M. Victor Branford) らとともに社会学会 (Sociological Society) を設立する。社会学会は都市学 (Civics)、人種研究 (優生学)、社会事業の異なった運動が連合して作られた。1904年に開催された世界最初の社会学会で、ゲデスは都市学には科学とアートとの緊密な組み合わせが必要であるとともに、都市学を具体的な応用社会学として考えるべきだと主張した⁽²⁾。

ゲデスはアンウイン (Raymond Unwin)、メアーズ (Frank Mears)、アーバークロンビー (Patrick Abercrombie) などの計画家や建築家に影響を与えた。ゲデスは都市社会学の発展のためには、十分な社会調査が必要なことを繰り返し強調していた (Abrams; 1968: 116)。かれは社会学の発展のためには、既存の科学の枠を破壊しなければならないと考えていた。かれは都市学を Civics とよび、この都市の科学はやがて多くの学問のうちで、もっとも実りの多いものとなるだろうと予言した。かれは都市学と社会学の結合を考えていた。都市の科学的研究はかれにとって、社会学の復活をかけたものともなっていた。都市学者の指導のもと社会学会は市民団体の結成や市民運動を奨励するなど都市計画に積極的にかかわろうとした。そして1907年には、ロンドン市庁舎での都市計画会議に代表者を送っている。

ドイツでは都市計画法が19世紀末から整備されはじめ1900年の「一般建築法」でほぼ完成をみていた。イギリスで最初の住宅・都市計画法が、ドイツに約10年遅れて1909年に制定される。ゲデスはその推進者の一人であった。かれは1910年には最初の都市と都市計画についての博覧会を開催している。都市博覧会は社会の進歩を象徴するとともに都市計画に展望を与えるもの

だった。ゲデスは社会学会で定期的に講演し調査の必要性を説いた。

こうして都市社会学はゲデスによって、“Civic Sociology”の名称のもとに成立するのである (Geddes; 1915=1972: 325)。かれは都市計画と田園都市運動に積極的にかかわって行った。ゲデスは都市社会学がアメリカで発展すると予想していた。アメリカでは都市の急激な成長のなかで、抽象的で不毛な政治学から具体的な市政学への移行が明白なかたちで見られるという。かれは世界中を駆けずり回った。ゲデスは年平均 10,000 マイルを移動する人間であった。

ゲデスは 1914 年以降インドの都市計画にかかわるようになる。そして 1919 年にインドのボンベイ大学の社会学と市政学の教授となる。それを期に、エディンバラ時代以来続けてきたダンディー大学の教授を辞している。かれはボンベイ大学で都市研究を行うと同時にインドの都市計画に尽力した。かれは 1924 年の帰国後もイスラエルのテルアビブ、イェルサレム、ハイファなどの都市計画に関係する。そして 1932 年に、南フランスのモンペリエで亡くなっている。かれが提唱した市政科学 (Civic Science) は、何よりも社会の改良と向上を目指すものである。次にゲデスが市政学や都市社会学の発展する兆候が見られるといったアメリカを見てみよう。

第 2 節 アメリカ社会学と都市研究

【アメリカ社会学の発展とシカゴ】

アメリカの社会学はヨーロッパの学問の強い影響下にありながらも、独自の知的風土を育てていた。19 世紀後半、アメリカはヨーロッパ諸国にも増して、急激な産業化を経験していた。アメリカの都市はヨーロッパからの移民を迎え、膨張を続けていた。アメリカの学問はイギリス、ドイツ、フランスなどヨーロッパの学問がダイジェスト的に導入されていた。とくに H. スペンサーは大きな影響を与えていた。アメリカの社会学は種々雑多な問題に対して、キリスト教的精神、公衆道徳の普及、ダーウィニズム、制度学派経済学などの知見によって、解決を計ろうとするものであった。

当時、社会学はヨーロッパにおいても、まだはっきりとした学問像をもっていたわけではなかった。このため社会学はアメリカの地で、独自の発展をとげることとなった (宇賀; 1976)。アメリカの大学はヨーロッパのような伝統がなかったので、社会学的学問の導入に熱心だった。イェール大学やコロンビア大学では、社会学が

W. G. サムナーや F. H. ギディングスによって早くから講じられていた。しかしアメリカ社会学の発展を担うのは、東部ではなく中西部のシカゴであった。ここでシカゴの発展を振り返って見よう。

シカゴの人口は 1840 年、5000 人に満たなかった。それが 20 年後には 11 万人、さらに 10 年後の 1870 年には、30 万人に達する。急激に膨張していたシカゴは 1871 年、大火に見舞われる。シカゴ大火は 17,500 軒を全焼し 1666 年の 13,000 軒を焼いた名高いロンドン大火の記録を、200 年ぶりに更新する大惨事となった。しかしシカゴの復興はめざましかった。シカゴは大火後、以前にもまして急激に膨張していった。むしろ大火はその後の発展に弾みをつけた。ここから本格的なシカゴの発展がはじまるのである。大火時に 30 万人だったシカゴの人口は、20 年後の 1890 年には、100 万人を超えていた。シカゴはアメリカにおいて、ポーランド人、ドイツ人、チェコ人、ギリシア人、イタリア人などが集中する最大の都市となった (Tilly; 1968=1969: 99)。

こうしたなかで、ロックフェラー財団は 1890 年に、シカゴに新しい大学を作るために莫大な寄付を行った。学長のハーバー (W. R. Harper) はシカゴに世界最初の社会学部を設けることとし、スモール (Albion W. Small) を招聘する。アメリカ社会学が自覚的な学問として登場したのは、1890 年代である (Coser; 1980)。しかしシカゴ大学の社会学部は恵まれた研究条件にもかかわらず、長い間さしたる成果をあげられないでいた。当時の社会学の研究は雑多な社会問題の寄せ集めであり、それを担当したのも、歴史学者だったり哲学者であったりした。スモールは社会学に社会改良の可能性を見ていた。

表 1. シカゴ市の人口：1840-1930

年	人口	増加率%
1840	4,470	
1850	29,963	570%
1860	109,260	265%
1870	298,977	174%
1880	503,185	68%
1890	1,099,850	119%
1900	1,698,575	54%
1910	2,185,283	29%
1920	2,701,705	24%
1930	3,375,329	25%

Bulmer, Martin, *The Chicago School of Sociology*, 1984, p. 13.

シカゴにおいてジェーン・アダムスの設立したハル・ハウスが、セツルメント活動の中心地となっていた。ハル・ハウスでは、社会改良のためさまざまな調査を行っていた。ハル・ハウスの調査にはC. ブースのロンドンの貧困調査などが意識されていた。シカゴ大学で都市研究を担ったのは、ハル・ハウスの一員であったズェブリンである。かれはゲデスのエディンバラのサマー・ミーティングに参加しゲデスの都市社会学に大きな影響を受けていた。ズェブリンやヘンダーソン (Charles Henderson) たちはボランティア研究を進めるなど強く社会改良を志向していた。シカゴ大学はハル・ハウスと密接な関係のもとに社会問題に取り組んでいったのである。シカゴは都市問題を通じて、次第に社会学の研究の中心となっていくのである。社会学は、当時の学問の中心だった東部ではなく中西部のシカゴで発展することになる。

【シカゴ社会学の発展と都市研究の革新】

アメリカにおいて社会改革と社会学は祖先を同じくしていた。その後、ズェブリンなど社会改良を志向した学者の何人かは政治的発言から大学を離れざるをえなくなった (鎌田; 1997: 77)。その一方で、純粹に社会学的問題に関心をもつ研究者たちが増えていた (Coser; 1978=1981: 28)。第一次世界大戦頃になると、主としてシカゴ大学の社会学部の指導のもとに、社会学者は徐々に確固とした地位を確立していった。産業化にともなう社会の変化は、従来にない対応を必要としていた。社会学の研究も少しずつ変化していった。シカゴの社会学を牽引したのは、トーマス (William I. Thomas) とパーク (Robert Ezra Park) である。とくにトーマスの研究は決定的な影響を与えることになる。

W. I. トーマスの社会学は、人間の本能の発露や進化法則の一環としてではなく、具体的な問題に経験的資料を「科学」にもとづいて分析することで進めようとするものであった。彼の社会問題へのアプローチと研究態度は社会学の研究に新しい地平を拓くものであった。現実のアメリカに基礎を置くようになっていたのである。そこに新聞記者などさまざまな経験をもつ R. E. パークが加わっていった。W. I. トーマスや R. E. パークは科学を強く意識した社会学を志向していった。こうしたなかで、社会改良にかかわる市政学 (Civics) や慈善行為 (Philanthropy) などの分野が、次第に社会学とは区別されていった (Bulmer; 1984: 39)。社会学から社会福祉の分野が分離されていったのである。

トーマスがズナニェッキ (Florian Znaniecki) とともに研究をまとめた『アメリカとヨーロッパにおけるポーランド農民』は経験的資料を科学的に構成しようとした点で画期的なものだった。トーマスの研究方法は社会学の研究に転機を与えた。トーマスはシカゴ大学を去っていった。しかしかれがアメリカ社会学に与えた影響は決定的であった。トーマスがシカゴを去ったことが、かえってシカゴの社会学を全米に広げる契機ともなった。シカゴの社会学はアメリカを代表する社会学研究のセンターとなった。

その後のシカゴ大学の社会学を指導したのは、パーク (Robert Ezra Park) である。かれの研究はトーマスの研究のように画期的であったわけではない。パークはトーマスの指導のもとにバージェスらの協力を得ながら、当時の第一線の研究文献を整理した画期的なテキストを編集する。このテキストは『社会学という科学への入門』と題され表紙の色からグリーン・バイブルとまでいわれ、科学的社会学の必読文献として広範に使用された。このテキストはさまざまな研究書をダイジェスト的に編集したものである (Park & Burgess: 1921)。

パークが1915年に発表した「都市-人間環境研究のための指針」は、それまでの社会改良的な都市研究とは違い科学的な都市研究として、その後の研究の指針になるものとして高く評価される⁽³⁾。かれは科学的な社会研究の方法として、人間生態学 (Human Ecology) を方法論とする都市研究を提唱する。人間生態学は生物学とのアナロジーで、社会をとらえようとするものだった。パークはゲデスのエディンバラの社会学の実験室にも集まってきたドイツの進化学者ヘッケル (E. H. Haeckel) の提唱した生態学 (Ecology, Ekologie) を社会学に導入する。さらにかれは、その生態学にジンメル⁽⁴⁾の相互作用論を組み込むのである。

人間生態学は人びとがコミュニティの共棲 (symbiosis) にもとづく競争 (competition) を繰り返す過程で、コミュニケーションを生み出し次第に合意 (consensus) を獲得し、ソサエティを形成していくというのである。その間、人びとの相互作用の形態は競争から闘争 (conflict)、応化 (accommodation)、同化 (assimilation) と変

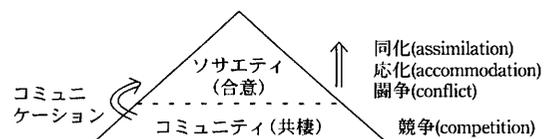


図1. パーク人間の相互作用の過程

化するなかでソサエティを形成するというのである。

パークに指導されたシカゴ大学の社会学者たちは、科学的方法にもとづいて積極的にシカゴの実態調査に邁進する。パークは明確に科学としての都市研究を意識していた。シカゴの研究者にとって、急速に発展するシカゴを「社会の実験室」に見立てたのである。かれらはグリーン・バイブルを念頭にフィールドに出かけていったのである。そのなかから、N. アンダーソンの『ホボ』、E. R. モウラーの『家族解体』、F. スラッシャーの『ギャング』、H. ゴーボアの『ゴールドコーストとスラム』、L. ワースの『ゲッター』などさまざまな研究が生み出された。その際、E. R. バージェス (Ernest Burgess) の都市発展の「同心円理論」(Concentric Zone Theory) は調査の指針となるものであった。アメリカの社会学はヨーロッパの学問の焼き直しの域を脱し、独自の学問を切り拓いたのである。

シカゴ大学の経験的調査を主軸とする研究は都市研究のみならず、社会学研究として一般化していった。経験的調査は自然科学の実験に当たるものとなっていった。こうして科学としての社会学が可能になるとされたのである⁽⁴⁾。イギリスでゲデスの手で“Civic Sociology”として登場した都市社会学は、シカゴでズェブリンの社会改良的な都市社会学を経て、新たにパークやバージェスらの指導によって、人間生態学 (Human Ecology) を経由することで、科学的な都市研究、つまり“Urban Sociology”となるのである⁽⁵⁾。

【アメリカにおける都市・地域研究の発展】

ゲデスのさまざまな学問を都市の科学のもとに Civics, Civic Science, Civic Sociology として、動員する研究方法はシカゴのズェブリンたちとは別に、何よりもマンフォード (Lewis Mumford) に受け継がれていった。1923年、L. マンフォードはアメリカ地域計画協会 (Regional Planning Association of America) を創立するとともに、ニューヨークにゲデスを招いている。両者は1915年以来、密接に手紙を交わしていたが、実際に会ったのは初めてであった (Novak; 1995)。ゲデスにとっては23年ぶりのアメリカ訪問となった。彼はニューヨークの社会調査のためのニュー・スクール (New School for Social Research) で、7月から8月にかけて講義している。アメリカ地域計画協会は、現実の都市問題のみならず、田園都市などさまざまな課題を論じる舞台となっていた。しかしその時は、都市研究の中心となっていたシカゴに寄らずに帰国している。1925

年には、L. マンフォードが帰国中のゲデスをエディンバラに訪ねている。マンフォードは都市、技術、芸術などについて、社会の本質に迫る洞察力に富んだ鋭い議論を展開し、各方面に深い感銘を与えていた。ゲデスやマンフォードは、パークの都市論が都市をあまりに病理的側面から見すぎていると批判した。

ハーヴァード大学は、新興のシカゴ大学の社会学部の成功に刺激されて、新しく社会学部を創設した。その際、迎え入れられたのが、特異な経歴をもつミネソタ大学で研究を進めていたソローキン (Pitirim A. Sorokin) であった⁽⁶⁾。ソローキンは豊かなヨーロッパの学問の知識を背景に、ジンマーマン (Carl. C. Zimmerman) などとともに、都市を農村と対比させながら、研究を進めていた (Sorokin; 1929=1940)。

L. ワースが1938年にアーバニズム理論を発表しその後の都市研究に大きな影響を与えることになる。アーバニズムは都市 (人口量・人口密度・人口の異質性) で生み出されながらも都市を越えていく「生活様式」である。アーバニズム理論はかれが体系的都市理論としてアーバニズム理論に近いといった R. E. パークはともかく、M. ウェーバーの都市論とはほど遠いものであった。しかしアーバニズム理論はその理論的未整備にもかかわらず、さまざまな調査研究の指針となった。とくにシカゴ系の学者にとって、アーバニズム理論の「都鄙連続法」(Urban-Rural Continuum) はソローキンの「都鄙二分

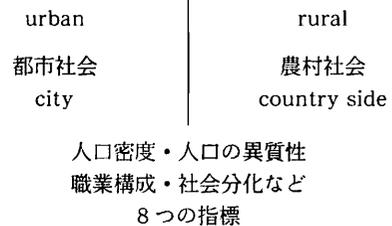


図2. ソローキンとジンマーマンの都鄙二分法 (urban-rural dichotomy) 説

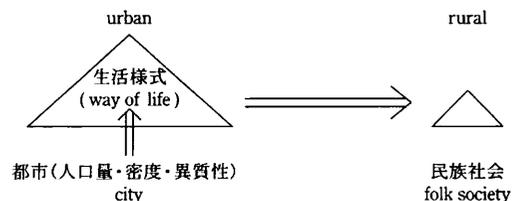


図3. ワースのアーバニズム理論と都鄙連続体 (urban-rural continuum) 説

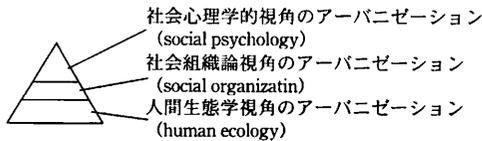


図4. アーバニズムの三重の分析視角

法] (Urban-Rural Dicotomy) に対する理論として高く評価され、シカゴ学派を象徴する理論となった⁽⁷⁾。

マンフォードたちの地域計画運動とは別に南部でリージョナリストたちの運動が活発化する。オーダム (Howard Odum) やムーア (H. E. Moore) は地域に表現されるアメリカ社会の不均等発展、不調和に関心を向けていた (内藤; 2001: 213)。かれらの運動は資本主義の発展が地域に大きな格差を生み出していることを意識したものである。かれらは南北戦争後関心の薄れていたアメリカの南北の地域格差の解消と文化的多様性を踏まえた南部地域の開発を課題としていた。1930年代の不景気は北部にも増して南部に大きな影を落としていた。このため地理学、経済学、文化人類学、政治学、社会学、工学などさまざまな学者が動員され、アメリカの地域の概念や地域区分に豊富な議論を展開したのである。とくにTVAの開発は研究の焦点となっていた。オーダムはマンフォードやゲデスに大きな影響を受けるのである (Tullos; 1990: 118)。多くのリージョナリストが南部のノースカロライナ大学に集ったために、かれらはノースカロライナ学派ともよばれている。

マンフォードは1938年に『都市の文化』を発表する。そこでかれはゲデスの強い影響を受けながら都市がエオポリス→ポリス→メトロポリス→メガロポリス→ティラノポリス→ネクロポリスと進化すると主張する。エオポリスは植物の栽培と家畜化から生み出される。ポリスは神殿や聖堂を核とする集落である。メトロポリスは古代アテネとバロック都市の首都に象徴される都市である。メガロポリスは資本主義の都市であり、富を誇示し金銭を評価する。ティラノポリスは寄生的状態であり、テロとギャングが横行する。ネクロポリスは戦争、飢餓、疾病の蔓延する死者の都市である。かれは、注意深くO. シュペングラー、P. ソローキンのように、社会の発展段階と現実とを混同してはならないことを指摘するとともに、都市の発展を単線的にとらえるのではなく、都市が新生する可能性を強調する。

マンフォードはシカゴ学派に代表されるアメリカ都市社会学の欠点として、都市論の系譜のみならず、都市の歴史や地理に関する知識の決定的な欠如を指摘する。シ

カゴの学者は現代のアメリカの大都市を自明の前提として議論を展開していると非難した。かれによれば、シカゴの都市社会学者は都市の社会制度について、あまりにも無関心である。この点では、ユートピア作家の方がまだすぐれていると非難する (Mumford; 1938 = 1974: 472)。

第3節 Urban Sociology の黄昏と ユーロ都市社会学の登場

【Urban Sociology の黄昏】

シカゴ学派の都市研究の理論的支柱となっていたのは、人間生態学である。人間生態学こそが、社会改良的な都市社会学 (Civic Sociology) から、科学的な都市社会学 (Urban Sociology) への革新を可能にしたのである。したがって、都市の理論をめぐる議論も、ここに集中する。人間生態学は人間の無意識的な競争に基礎を置いている。しかし人間生態学は、競争を社会的なものとするアリハン (Mila Alihan) の社会生態学や競争が文化的価値によって制約されたものだとするファイアレー (Walter Firey) の研究によって、論破されることになる。都市社会学の研究は実証的研究の盛行とは裏腹に、理論的には根底から瓦解していた。

都市の社会学的研究は家族、近隣、コミュニティ、ネットワーク、階級・階層、産業、社会運動などの多様な脈絡のもとに研究が進められ、分析の焦点となるはずの都市 (人口の量・密度や集落の規模) との関連を失っていった。第二次世界大戦後、社会学研究が飛躍的に発展するなかで、都市社会学は次第に周辺的な研究分野となっていく (Savage & Warde; 1993: 18)。

こうしたなかで、ドン・マーチンデルは都市に関連するさまざまな項目が並んでいる都市社会学のテキストには、都市を説明する以外のすべての項目があると、都市社会学の空洞化を告発する。彼はその一因として都市社会学が「制度」の問題を等閑視してきたことを指摘する (Martindale; 1958: 10)。やがて都市社会学の衰退がシカゴ学派の内外でいわれるようになっていった。つまり社会現象と人口や集落の規模 (Urbanity) との関連を保障していた人間生態学理論は崩壊した。また、個別研究の場では、社会現象を都市との関連で分析することの意義は薄れていた。こうして、都市社会学の危機や終焉がいわれるようになった。その後、人間生態学はホーリー (Amos H. Hawley)、クイン (James Quinn)、シュノア (Leo F. Schnore)、ダンカン (Otis Duncan) などによ

て、何度も再構成しようとする試みがなされる。しかし人間生態学を再興することは出来なかった。アナロジーは所詮アナロジーでしかなく、現実の理論はあくまで社会の具体相に沿って構成されるものでなければならないのである。このため都市の研究はもっぱら調査研究の積み重ねとなっていた。

その間、人間生態学に代わる都市社会学の理論が模索されていた。第二次世界大戦後、アメリカのプレゼンスが大きくなり、アメリカ人が世界各地に出かけるようになると、これまでの都市研究があまりにもアメリカの経験を普遍化していたのではないかとの反省が生み出されていった。ショバーク(Gideon Sjoberg)は都市社会学がアメリカの都市を世界の都市一般と誤解しているとして、比較都市社会学(Comparative Urban Sociology)を、また歴史的な都市を無視して現代都市を都市一般と理解しているとして、前産業型都市(Pre-industrial City)類型を提唱する。そしてかれは都市を、1. 物理的都市(city)、2. 技術(technology)、3. 権力(power)、4. 価値(value)の4つの鍵概念からなる「四変数理論」を提唱する(Sjoberg; 1959)。都市研究にはこの他、T. パーソンズのシステム論を援用したワレン(Roland Warren)のコミュニティ理論などが提唱されていった。しかしこれらの研究は大きな流れにはならなかった。都市社会学の研究は拡散し、都市研究としての内実は蒸発していった。

ショバークの比較社会的視点と歴史的視点との必要性はかつてのマンフォードのシカゴ学派批判と同様のものである。ショバークは20年後に、マンフォードと同じ批判をしたことになる。しかしそこにマンフォードの名前はなかった。しかしその間、マンフォードは都市研究者として高名を轟かせ、その学問はヨーロッパでも高く評価された。彼は一人の研究者としては、稀有なほど大きな影響を学問分野を超えて与えた。しかし彼がいわゆる都市社会学者に影響を与えることはなかった。

都市の研究は人間生態学崩壊後に、都市研究としてのまとまりをもたなくなっていた。それは都市の社会学的研究である以上に、家族の研究であり、ネットワークの研究であり、階層階級の研究となっている。社会学研究の隆盛のなかで、都市社会学の衰退がいわれるようになる(Reiss; 1957)のである。都市社会学の退潮は誰の目にも明らかとなった。ついにはシカゴ学派都市研究を担ったE. W. バージェスやD. J. ボーグまでが、都市社会学の黄昏を指摘するようになる(Bougue; 1964)。

【ユーロ都市社会学の登場】

次にヨーロッパの都市研究はどのように進められていたのだろうか。ヨーロッパでは伝統的に、都市がドイツでは歴史学、とくに法制度史、フランスでは地理学によって研究されてきた。ヨーロッパの社会学者には都市をG. ジンメルやM. ウェーバーのようにアド・ホックに社会学的な研究対象としてとりあげることはあっても、都市を体系的に理解しようとする研究はなかった。ゲデスの試みも例外的なものに終わっていた。

第二次大戦後、ヨーロッパはアメリカの圧倒的な影響を受けるようになる。その際、社会学はアメリカを象徴する学問分野だった。フランスではブラーシュ(Paul Vidal de la Blau)以来の伝統をもつ地理学が都市研究を進めていた。しかしかつて「万学の母」といわれた地理学も各部門が自立してゆき次第に雑多な知識の寄せ集めと化していた。地理学者は自らの知識の理論化、体系化に悩み続けていた。このことが、地理学の大きなアポリアとなっていた。このためフランスでは、シカゴ学派の人間生態学が地理学に理論的モデルを提供するのではないかとして検討された。フランスにおいて地理学は伝統的に社会学との接点を求めていた(Sorre; 1957, 藤田; 1979)。ヨーロッパの学者の間では、社会学はアメリカの学問として知られるようになった。

ヨーロッパの大学はエリートの養成の側面を強くもっていた。それでも第二次世界大戦後、アメリカや日本には遅れたが、ヨーロッパの大学も徐々に拡張されていった。イギリスでは1960年代以降、新大学が次々と創立される。イギリス社会学は1908年までに都市計画、優生学(Eugenics)、慈善事業、教育などの分野に編成されていくなど早くから活動していた(Abrams; 1968: 105)。しかし社会学は長い間、学問的内容に欠けるとして低迷していた。新大学では伝統的な学部に加えて、ヨーロッパには知られていなかった社会学部が新たに設置されることとなる。1960年代から1970年代に社会学部が、次々と新設されていった。これにともない社会学の影響力が大きくなっていった(Collins; 1985 = 1997: 38-39)。そこではヨーロッパにアメリカ社会学が盛んに紹介され、その一環としてシカゴ学派の都市社会学も検討された。しかしアメリカ社会学も検討段階を過ぎると、ヨーロッパに独自の社会学の展開が見られるようになる。

こうしたなかで、西ヨーロッパで新しい都市研究がマルクス主義を思想的背景に登場することとなる。カステ

ル (Manuel Castells), R. E. パール (R. E. Pahl), ピクバンス (C. G. Pickvance), ミンジオーネ (Enzo Mingione) などが、新しい都市社会学を提唱する。彼らはルフューブル (Henri Lefebvre), アルチセル (Lois Althusser), グラムシ (Antonio Gramsci) などの影響を受けながら、西ヨーロッパの思想的伝統のもとに、都市社会学を新たに展開しようとしたのである。彼らの研究は1970年代後半の不況と資本主義の危機のなかで、支持を広げていくことになる。彼らの研究は研究者によりアクセントの違いはあるにせよ、都市を資本主義との関連で分析しようとするものである。

かれらはユーロ・マルクス主義のもとに、細分化、断片化のなかであいまになっていた都市研究を総合的にとらえようとするものであった。かれらは舌鋒鋭くシカゴの流れを汲む調査研究に迫っていった。かれらの都市社会学は、各方面に大きな刺激を与えることになる。

新しい学問のあり方は学問分野を越えて問われていた。ラコスト (Y. Lacoste) はフランスの人文地理学で聖化されていたブラーシュをも祖上に乗せ、地理学の体系化に潜む根底的困難を論破した (藤田: 1982: 425)。ユーロ・マルクス主義は地理学にも、新しい息吹を吹き込んだ。ハーヴェイ (David Harvey) は当初学問として体系を欠く地理学を論理実証主義にもとづく科学主義の立場から再構成することを課題とした。その後、かれは一転しマルクス主義の立場から地理学を再構成しようとする。ともあれ、ユーロ都市社会学はD. ハーヴェイなどの他分野の研究を交え、都市社会学の研究に新たな地平を拓いている。ハーヴェイはかつての都市社会学者の傍らに地理学者ディキンソン (Robert. E. Dickinson) の都市研究があったように、新しい都市社会学者にさまざまな刺激を与えている。

西ヨーロッパ諸国はアメリカや日本などには遅れたものの1960年代から70年代に、相次いで大学の拡充に踏み切っている。西欧諸国は大学教育の大規模化にともない研究者の数や大学院生の数が増加している。これにともなって、都市の社会学的研究も飛躍的に増加することとなる。都市に関する学術雑誌も次から次へと創刊される。今や都市に関する研究書の出版や研究論文の発表は、以前のように特別なことではなくなっている。

イギリスでは1992年、ポリ・テクニク (高等技術専門学校) にユニヴァーシティの名を与えたため学生数が倍増する。こうしたなかで、都市の社会現象はポスト・モダン論、情報社会論、カルチャー・スタディーズ、ジェンダー、エスニシティ、グローバリゼーションなど

との関連で、実に多彩な議論がなされている。アメリカの都市社会学研究は社会学の退潮とも重なり、社会研究のなかに溶け込んでいる。アメリカでもC. フィッシャーのように下位文化論 (sub-culture) やネットワーク分析で、シカゴ学派の都市研究を再評価しようとする研究者も出ている (Fischer; 1984)。しかしアメリカ社会学は往年のように知的刺激を生み出すものではなくなっている (Gans; 1990, 柏岡; 1995)。ヨーロッパの都市社会学はその後、A. ギデンズの「時間-空間論」など社会学の基礎理論との関連を意識したものや、社会学理論どころか都市理論との関連をほとんど意識しないものまで、都市研究は多様な展開をみせる⁽⁶⁾。今や1年間に発表される都市社会学関係の著書はタイトルすら憶えられないほど膨大な数に達している。

第4節 日本における都市社会学の形成

【都市問題と社会科学】

日本で都市の社会学的研究がはじまったのは、いつごろなのだろうか。日本の近代化は欧米の文化の影響下に進められた。明治以降、近代的都市の建設は、大きな課題となっていた。日本は土木や建築など西洋の科学や技術を積極的に導入する。欧米風の建物が各地で建てられたばかりか、伝統的家屋も欧米の強い影響を受けることとなった。また都市の政治や行政についても、多様な議論が展開されていた。しかし都市の社会学的研究という視点は希薄だった。

日本の都市は明治初頭に一時的な衰退の兆候を示す。しかしその後は近代国家の拠点として急速に成長することになる。東京や大阪といった大都市では、さまざまな社会問題が顕在化していた。こうしたなかで、横山源之助の『日本の下層社会』や三宅馨の『都市の研究』が生み出されていた。その一方で、近代的な都市生活への模索がなされていった。一部の内務官僚はイギリスで田園都市 (花園都市) が発表されてわずか5年後に、それに関する報告書を発表するほどであった (内務省; 1980)。都市の成長とともに都心の居住環境が悪化し、大阪では都心の喧騒を嫌って郊外に住む人たちが出ている。

日本は第一次世界大戦中、急激な経済成長を遂げる。これにともなって、日本は未曾有の都市化を経験する。都市への大人口移動が起こった。都市の急激な膨張は、都市の拡大をそれまでも増して無秩序なものとしていた。貧困は大きな社会問題となり、労働争議が頻発していた。都市には抜本的な政策が必要となっていた。そう

したなか、1917年に突如、ロシア革命が起こる。史上初めての社会主義革命は、人びとに大きな衝撃を与えた。人びとは「社会」への関心をみなぎらせていた。また、高等教育の要求の高まりで、大学の拡張は大きな課題となっていた。1918年の大学令は帝国大学を分科大学制から学部制に改めるとともに、大学でありながら法的な存在ではなかった私立大学に法的地位を認めた。一連の大学改革は、若者の大学への進学意欲を高めた。大学の拡大ともなって経済学や社会学関係の講座が急増していった。さらにロシア革命に続くシベリア出兵、米騒動で、世の中は騒然としていたのである。若者の「社会科学」への関心は、いやが上にも高まっていった。

1919(大正8)年、都市の無秩序な拡大を規制するためようやく「都市計画法」と「市街地建築物法」が公布される。都市の急激な膨張は都市への関心を高めるとともに、それまでの「土木・建築論」に加えて「市政論」の必要性を生み出していた。大正後期には、社会学が一個の科学として自覚化されるようになる(川合; 2001: 18)。

1922(大正11)年には東京市政調査会が都市の生み出すさまざまな問題を研究する総合的研究機関として創立される。経済の発展は新たな住宅を希求する新中間層が形成していた。都市化は関東大震災を経て、新たな段階を迎えていた。大正期には都市への関心が一気に高まったのである。しかし大正末から昭和初期の都市研究は社会問題としての都市の把握であって、都市を社会学の研究対象として、明確に位置づけようとするものではなかった。シカゴの都市研究などが戸田貞三などによって、断片的に紹介されていた。また、高田保馬や新明正道などが社会学理論の観点から都市に触れていた。都市への関心の高まりは、山口正『都市生活の研究』、柳田國男『都市と農村』、石川栄耀『都市動態の研究』などの発表となってあらわれていた。1936(昭和11)年の社会学会は都市社会学の部会が設けられるなど都市研究にとって記念すべき年となった。しかしその後社会問題を背景とした都市研究は、敗戦まで事実上不可能になっていた(磯村; 1977: 151)。

【奥井復太郎と磯村英一】

日本で都市社会学の創立を担ったのが、奥井復太郎である。奥井は大正の思想的たかまりのなかで、クロボトキンの無政府主義に関心をもった。その後、ジョン・ラスキンの研究を経て、社会改良と都市経済の研究のためドイツへ留学することになる。奥井は足掛け4年間の留

学から帰国後、「社会政策論」の研究を進める一方で、都市研究の体系化のために新たにシカゴの社会学者の都市研究を導入するようになる。かれはシカゴ学派の都市研究を踏まえて、東京の実態調査に没頭するようになる。

奥井はラスキン思想—ドイツ中世都市—シカゴ学派の研究をへて、東京のフィールド調査に邁進した。その成果が、1940(昭和15)年に発表された『現代大都市論』である(奥井; 1940)。この書は都市の理論、現状分析、政策などが体系的に構成され、欧米にも類を見ない独創的な都市研究となっている⁹⁾。

奥井とは別のかたちで、都市の社会学的研究に入っていたのが、磯村英一である。磯村は学生時代に関東大震災での救援活動に参加するなど、異色の経験をもつ行政マンとして都市の研究を進めていた。かれはシカゴ学派の研究に目を配りながら、都市の病理へ鋭い目を向けていた。日本の都市社会学は違った角度から研究がはじまった。奥井は社会思想から出発し、経済学をへて、都市社会学にたどり着いた。これに対して、磯村は行政マンとして現実の都市問題とかかわるなかで、都市社会学を生み出していった。

戦時体制下、高度国防国家の建設が緊急の課題となると、国土計画をめぐる議論が急に活発になった。国家総動員体制のなかで、社会学者も国土計画に動員されるようになる。そこで発表されたものの多くは、ナチスドイツの理論の影響を受けたものであった。奥井も『国土計画』を発表する。しかしかれの国土計画の特徴は、国土計画を都市計画の延長線上でとらえている点である。そして国土計画の必要性を資本主義の発展が社会生活の混乱をもたらすからだとして、H. オーダムらノースカロライナ学派のリージョナリズムやチューネンの経済立地論などに言及しながら議論を展開する。かれの研究は時局迎合的な国土計画論が多いなかであって、異色の光彩を放っていた。戦時下において「疎開の問題」など都市に関する話題にはことかかなかった。また、戦争遂行のため「町内会」は重要性をましていた。生活物資が町内会を介して配給されたのである。町内会をめぐる軋轢も激しいものがあつた。社会学者は町内会の運営をめぐる意見が期待された。

【都市社会学の制度化】

日本は敗戦後、アメリカ軍の統制下に入る。日本はアメリカの圧倒的な影響を受けるようになる。日本は、破壊から復興へと問題が山積みしていた。戦後の都市は疎開人口の帰還、海外からの引揚者などで混乱をきわめて

いた。敗戦は社会学をめぐる状況に大きな変化をもたらした。まず、戦後の新制大学の発足にあたり、社会学の講義数が急増する。戦後は大学の数にも増して、社会学科目や講座の数が増加する。社会学の講義が文科系の大学に設置され、社会学への需要が増加するのに対して、研究者の供給が間に合わないほどだった。

戦後、アメリカ文化が怒涛のように流れ込むと、社会学者の研究が大きく変わっていった。社会学者の関心もドイツ社会学からアメリカ社会学の強い影響を受けるようになる。これにともなって、社会学の研究も思弁的な「社会学論」から経験的で具体的な「社会問題」へと代わっていった。都市に関心をもつ社会学者も増えていった。

都市社会学への期待がたかまっていた。磯村英一は行政マンから大学に転じ社会学を強く意識した研究を発表する。また、P. A. ソローキンに影響されながら、戦前に農村社会学に多くの成果をあげていた鈴木栄太郎が都市研究に参入する。さらに、シカゴ大学でL. ワースから直接都市研究を学んだ矢崎武夫が帰国し都市研究に加わっていった。だが、都市に関心を寄せていたのは社会学者ばかりではなかった。それどころか、都市はひとつの学問分野で理解するにはかぎりがあった。都市という問題の取り上げ方は、どの学問分野でも新鮮な研究課題となっていた。各地で都市研究者の集まりがもたれていた。そこで、1953年には奥井復太郎を中心に「日本都市学会」が、都市を共通の研究対象とする歴史学、地理学、建築学、土木工学、経済学、政治学、行政学、社会学などの研究者が集まり結成されている。また、その一方で、「村落社会研究会」が経済学、社会学、歴史学、地理学、民俗学などの分野の研究者があつまり結成される。

日本は1950年代の後半から経済が急激に成長しはじめる。これにともない日本は未曾有の都市化を経験する。都市は急激な膨張を見せる。農村から都市への人口の大移動が起こった。過剰な人口を抱えていた農村は都市の労働力需要に次々と応えていった。この時代、都市が人々の注目を浴びたのは、何といても急速な都市化である。社会の全般的な都市化であった。都市化は、日本の地域社会の根底を切り崩していた。都市化は学者たちの関心の的となった。この時期、社会学会でもシンポジウムで「都市化」の問題をとりあげている。その際、脚光を浴びたのが、L. ワースの「アーバニズム理論」である。

戦後の社会科学に大きな影響力をもったのが、マルクス主義であった。マルクス主義者も都市に着目しはじめた。都市は資本主義の拠点であるばかりでなく、矛盾の集中した場所であった。都市は資本蓄積の場であり階級

闘争の場であった。激しい都市化は資本の強蓄積の結果であった。都市化の勢いはとどまることを知らなかった。当初、都市化は都市の無秩序な発展をもたらしたが、村の過剰人口の圧力を軽減するものとして歓迎された。しかし急激な都市の膨張の対極で「農民層の分解」や「むらの解体」までがいわれるようになった。村の解体にともなって、消えていく村の「共同性」が関心を集めた。ここで村落「共同体」が盛んに議論された。この意味では、都市化論と共同体論は表裏一体であった。都市の過密と村の解体が同時に進んでいた。農村は都市化による人口の流出で、むらの生活に困難をきたしていた。日本農村の伝統的な問題であった過剰人口に代わって、それまで夢想だにされなかった「過疎」が話題となっていた。

第5節 都市社会学の確立と多様化

【都市化論とコミュニティ論】

大学や研究機関の数はその後も増え続ける。都市を専門的に研究する社会学者もめずらしくなくなる。しかしそのことは、他の学問分野も同じであった。各分野で研究者が増加していた。経済学、政治学、行政学、社会学、歴史学、地理学、建築学など各分野がひとつの学会をつくれるほどの人間を抱えるようになった。その結果、都市研究は日本都市学会が意図した総合化へと向かうのではなく、分化の方向を示していった。それどころか、ひとつの学問分野ですら、さらにそのなかで研究分野が分化するのである。社会学のなかでも、都市を人口や機関といった多義に関連する議論から切り離して研究が進められていった。しかしマルクス主義の研究者は、資本主義への関心を介して全体性への関心をもっていた。

日本の都市社会学者はアメリカでの議論を導入して研究を進めてきた。しかしアメリカの都市社会学には人間生態学の崩壊後、これに代わる理論が生み出されなかった。このためワースのアーバニズム論やパークやL. F. シュノアなどの理論が断続的に繰り返し検討された。都市社会学への期待がたかまり、研究が増大するなかで、都市研究の根拠があいまいになった。都市社会学の都市社会学たる理由はどこにあるのか。都市社会学の存在根拠が疑われるようになっていった。アメリカでの都市社会学の黄昏は日本では「都市社会学の危機」ととらえられた⁽¹⁰⁾。

地域社会は都市・農村のいずれを問わず、都市化によって変貌を遂げていた。都市化はさまざまな軋轢を地域社会にもたらしていた。地域社会は旧来の組織が急激

に解体するなかで、新たな共同性を必要とするようになる。こうした関心が、コミュニティ論への着目となって表れた。コミュニティ論は都市社会学のアイデンティティとも関連して、社会学のひとつの焦点となった。多くの社会学者が地域集団やコミュニティの研究に取り組んでいった。この間あまり話題にはならなかったものが、被差別部落や山谷ドヤの研究などの地味な形で着実に進められていた。

都市化は大きなひずみをもたらした。各地で公害や環境破壊などの問題が深刻化していた。これにともなって、住民運動が全国各地で頻発する。住民運動が大きな話題となった。この時期に「地域社会学会」や「都市社会学会」が結成されていった。都市社会学の研究は地域の具体相を経験的にとらえるミクロの研究となっていた。そこでは、都市とは何かといった議論とのかかわりを失っていった。都市の社会学的研究は多彩なものとなる一方で、都市研究としての性格は希薄化していった。

その間、日本ではマンフォードの著作が次々と翻訳されていった。かれの著作は建築学者、哲学者、歴史学者、地理学者、都市計画家、政治学者、経済学者、文学者の間で検討された。マンフォードほど広範な読者を獲得した都市研究者はいなかったといっても過言ではない。この間、社会学者が急増していた。にもかかわらず、そこに、社会学者の陰はなかった。

【都市社会学の発展と分化】

新しい都市研究の動きはアメリカではなく、ヨーロッパからやってきた。ユーロ・マルクス主義の影響は哲学、政治学、経済学ばかりではなく、都市研究にも及んできた。M. カステル、R. E. パール、J. ロジェキース、M. ハーロー、E. ミンジョーネなどの研究が次々に紹介されていった。とくにカステルはアメリカを活躍の舞台とするとともに、大きな影響を与えるようになる。ユーロ・マルクス主義の都市研究は「新」都市社会学とよばれ多彩な議論を可能にした(吉原; 1994)。その一方で、ユーロ・マルクス主義に基づく研究は、既存のマルクス主義に基づく研究とのあいだに齟齬をもたらすこととなった。

さらにユーロ都市社会学がしばしば意識的にシカゴ学派を取り上げていたために、都市社会学者は以前にも増して、自らの正当化をシカゴ学に求めていった。実際の都市研究者がどこまで、シカゴ学派の研究を意識していたかは別にして、都市社会学者はシカゴ学派の影響に覆いつくされ、他の研究を省みることはなくなっていた。

このころになると、経済成長の果実は大学関係者に研究費の増額という直接的なカタチでやってきた。国立大学では社会学が実験講座とされ、研究費が飛躍的に増加する。また、科学研究費が社会学の分野にも増額されていった。研究者はさまざまな研究資金で潤い始めた。これにともなって、夕張、福山、神戸、水島、室蘭、川崎などの地方都市で、社会学者の手による大規模な地域調査が行われる。

日本は1980年代の後半に、再び急激な経済の拡大を迎えることになる。東京はニューヨークやロンドンと並ぶ資本市場となる。東京の世界都市化が議論され、ウォーターフロントの開発やビル建設のための地上げが世間の大きな話題となった。若者が踊り狂うジュリアナ・東京はまさにバブル経済の象徴であった。日本は経済的拡大のなかで、深刻な労働力不足に陥る。

1950年代後半から1970年代初期の経済の高度成長を労働力の面から支えたのは、農村の過剰人口であった。しかし1980年代後半の農村は、「過疎」が深刻化しており、出稼ぎ労働力すら枯渇していたのである。経済活動の拡大は労働力を外国に依存せざるを得なくなっていた。このため日本にはフィリピン、中国、韓国などの近隣諸国ばかりか、バングラデシュ、イラン、さらに中南米諸国から多くの人たちが流入する。日本の都市もアメリカや西ヨーロッパの都市と類似したエスニシティの問題を抱えるにいたった。地域社会の国際化が静かに進んでいった。外国人の流入はバブル経済の崩壊後も途切れることはなかった。日本の各地で外国人のコミュニティが形成されている。エスニシティの問題は都市研究の大きな課題となっている。

神戸は1995年に大震災に見舞われた。阪神大震災は6000人を超える死者、多数の負傷者、家屋の倒壊など甚大な被害をもたらした。こうした事態に直面して、震災地で日本ではじめて大規模な「ボランティア活動」が広がった。阪神大震災は都市の危機管理のあり方を問いただした。研究者の関心は、多方面に広がっている。豊かな消費生活は環境問題など、これまでとは違った生活問題を生み出してきている。現在の都市社会学の研究は理論的にも実証的にも、研究方法や研究テーマの点でも、研究者や研究グループごとに大きく異なり、ひとつの都市像を描くことが困難になってきている。ボランティアやNPOの活動は研究者の研究対象との係りをも変えてきている。

第6節 岐路に立つ都市社会学

【社会科学像の変化と社会学研究の拡散】

社会学は社会科学のなかで研究対象も研究方法もあいまいで、1980年代までは未熟な学問分野と思われてきた。また、このことがさまざまな社会問題に対して、社会学者に柔軟な態度をとらせることともなった。しかし日本では、そのあいまいさが経済学をはじめとする他の社会科学の分野の行き詰まりもあり、かえって社会学に対して期待の高まる理由となっている。あいまいさは、一面で柔軟性でもあった。行政も社会学には新たな可能性を認め、そのことが大学でのポストの増大につながったのである。社会学はトピック的に新たな研究分野を付け加えていった。さらに社会学は看護、福祉、環境などの学部が設置される時、その隣接科学として期待された。現在、人びとの関心をあつめているのが、環境、福祉、看護、外国人労働者、ボランティア、ホームレス、NPO・NGO、ガヴァナンス、シティズンシップ、公共性などの分野である。社会学はこれらを柔軟に取り込んでいる。

都市社会学はイギリスで、P. ゲデスによって Civic Sociology として登場した。その都市社会学はL. マンフォードによって発展された。また、シカゴにおいても C. ズウェリンに継承されていた。しかし R. E. パークは

ちは都市問題から「社会福祉」や「都市計画」の側面を分離することで、新しい都市研究を求めた。ここに人間生態学を理論的支柱とする科学的な都市社会学 Urban Sociology が生み出されたのである。その都市社会学が日本で再び社会福祉を付け加えようとしている。その意味では、都市社会学は原点回帰しつつあるともいえるのである。

近代は都市の時代であり、都市計画と貧困の問題は、都市社会学はおろか社会学、いや社会科学の原点である。奥井復太郎は都市計画に熱心にとりくんだ。しかしその後、都市計画は社会学において、ほとんど取り上げられなくなった。これに対して、都市下層はスラム、ドヤ、ホームレス研究として継続的に取りあげられてきている。

日本では研究者の増大で研究者のあいだにも、大衆社会化状況が広がっている。都市研究も哲学や歴史などとの関連を弱めている。都市社会学も都市の基礎理論よりも、現実問題への指向性を強くしている。最近の社会学の研究は一面でジャーナリズムに近くなっている。雑誌や単行本、テレビ、ラジオなどでとりあげられた問題を、後追いつているような研究が少なくない。その場合、社会学者はジャーナリズムほど扱う問題の範囲は広くはないし、また現実を抉り出す力が特段すぐれているわけではない。その意味では、社会学という学問分野は、名称はともかく実態は蒸発しているのかもしれない。

研究拠点都市・大学

× 批判

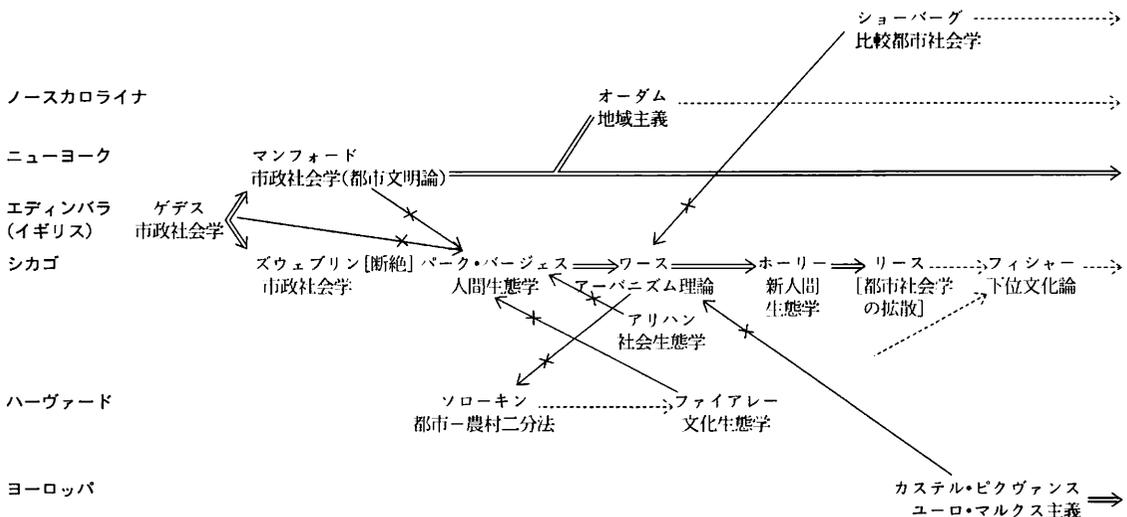


図5. 都市社会学方法論の流れ

近年、社会の大きな変化にともなう、学問観も変わってきた。ソヴィエトの崩壊は冷戦下で培われてきた科学観を変えた。社会科学の研究は現象の背後に貫徹する「法則」や「真理」をもとめるものではなくなっている。19世紀末以来の学問的真理や社会科学に関する認識が変わってきた。社会科学の衰退がいわれるとともに社会科学像も変化している。研究者のテーマは現象の背後に何かを求めるというのではなく、日常的な社会問題となっている。このためさまざまな学会や研究会が組織されている。

都市の社会学的研究に関連する学会をざっと書き出しただけでも、都市学会、地域社会学会、都市社会学会、都市住宅学会、都市計画学会、都市経営学会、マンション学会、自治体学会、環境社会学会、まちづくり学会、都市史研究会、近代都市史研究会、比較都市研究会、ボランティア学会、NPO学会、寄せ場学会など枚挙に暇がないほどである。これらの学会で毎年多くの研究発表がなされるとともに、シンポジウムが開催されている。学問をめぐる社会情勢の変化は多くの学会を必要とするようになっている。この意味では「学会の時代」「組織の時代」がやってきたといえるだろう。

こうした学会の隆盛は、大学や大学院の増設により、都市関連の研究者が急激に増えたためである。これにともなう都市関係の学会も急増する。とくにテーマの多彩さと柔軟さをもつ社会学関係の研究には、大きな期待が集まった。さらに、文部科学省は大学院を研究者養成から専門家の育成に移行させる政策の変化を実施した。これにともなう、大学院生や研究者の数が急増している。また、大学の改革は研究者に自己の研究の点検を余儀なくさせた。こうしたなかで、一人の研究者が発表する論文の数は飛躍的に増えている。今や研究を発表したことよりも、しななかった方が問題になる時代となっている。舌禍事件や筆禍事件はもはや過去のこととなっている。

【社会の変化と岐路に立つ大学と学問】

社会学において研究テーマは徐々に学校で教えられるものではなく、現場で体験するものとなってきている。社会学にはあらゆる項目がある。社会学のほとんどの分野は他の学問の領域と重なっている。では、社会学者は他の学問分野の研究者とどのように違うのだろうか。その区分を学問の内容から行うことは難しい。社会学者を社会学者として自覚させているのは、大学での卒業学科、学会の所属などであり、その意味では文部科学行政

に対応したものでしかなくなっている。

日本では大学が精緻な縦割り行政のなかにあり社会学も一度場所を確保すると、アメリカやヨーロッパのように他の学問分野と存在をかけて競合する必要はなかった。学問の間に設定された縦割りの壁は各学問を直接波風にさらすことはなかった。公的資金はこの壁の幅に応じて割り当てられるのである。したがって、研究者も外部の社会とのかかわり以上に、業界の中や行政の意向に注意を払うようになってきている。この意味では、文部省も戦後の各省庁の業界化に対応して、研究者の組織化に成功したといえよう。これにともなう、学会の組織化は一面で、研究者が利益集団と化し他業界の研究者や独立した研究者の研究を貶める危険をもはらむことともなっている。

しかし社会学研究も量的拡大のなかで試練に立たされている。都市社会学にとどまらず、社会学の研究の多くが、誰もが程度の差はあれ、生活のなかで経験をもったことがあるものなのである。社会学が現実の社会を直接研究対象としようとするればするほど、わざわざ大学において外国の本や社会経験の乏しい学者から学ぶものではなくてきている。まして大学院でホームレスにまで税金を払わせて学ぶものではない。

都市社会学の対象の多くは、もはや大学の教員が一番知識をもっているところではなくてきている。学者はどこにでもいる時代となった。A. ギデンズが強調するように、社会科学の知識は一般化されるほど社会の内部に取り込まれ、その成果は自明のこととなり意識されないようになる。社会学の知識は、単純な増加形態を示さない。このため社会科学の業績は成功によって、かえって覆い隠される側面がある。この点では、社会科学は自然科学よりもはるかに強い影響力をもっている。社会学の成果は、モダニティとレフレクシブリーに関係しているのである (Giddens; 1984=1998: 34)。

学問的知識は19世紀から20世紀に、アカデミー、サロン、サークルなど外部から大学に取り込まれ、大学を学問の中心へと発展させていった。その頂点が、新しい大学として設立されたベルリン大学の理念に象徴的に謳われた。しかし今日、大学は再び知識の中心としての地位を失いつつある。新しい学問的知識が大学の外部で生み出されようとしている。とくに、現代の社会学の研究にはその傾向が強くなる。かつて社会学は「社会学者の数」だけあるといわれた。しかし今日では社会学の研究は「社会人の数」だけあるようになってきている。最近の社会学は社会科学の他の分野の研究にも増してそうした方

向への発展志向性を強くもっている。

注

- (1) コントの提唱した実証主義 (positivism) は、日本語での訳語のもつニュアンスとかなり違うので注意のこと。コントの実証主義運動は次第に科学的性格を喪失して行き、ついに「人類教」を提唱するにいたる。そしてかれは人類教の礼拝に関心を集中させることになる。多くの人びとが実証主義者を掲げて教会に集った。実証の意味については、レイモンド・ウィリアムズの文献を参照のこと。(Williams; 1976=1980: 287)。
- (2) 最近、イギリスにおいてもゲデスの都市社会学を見直そうとする動きが出ている。ゲデスはユートピアンだとされ、社会科学のなかに位置づけられてこなかった。しかし M. セイヴェージと A. ウォードは P. ゲデスと M. V. ブランフォードの研究がシカゴ学派によって見失われた次元としてつけ加えなければならないと主張する (Savage & Ward; 1993: 18)。
- (3) 秋元律郎は「社会的実験室としての都市」ということばについて、これほど声高にうるさく引用されてきたことばも少ないとしたうえで、それはけっしてパークの発想ではなかったし、また都市研究にさいして示された彼独自の見解でもなかったことを指摘している (秋元; 2001: 298)。
- (4) W. ゾンバルトや J. ホイジンガなどヨーロッパの学者も、パークらシカゴの都市研究に注目した。とくにその背後にあるデュエいの哲学は脚光をあびた。しかしヨーロッパの学者は都市研究については、W. ゾンバルトがただたんに統計的資料を集めているといったように概して否定的であった (藤田; 1978)。
- (5) パークの著作にも Urban Sociology ということばがないわけではない (Park; 1953: 98)。しかしこのことばはかれにとって、一般的な用語ではなかった。実際に Urban Sociology という言葉を自覚的に使い研究を進めたのは、ずっと後の 1929 年のベッドフォード (S. E. W. Bedford) の研究であるといわれている (磯村; 1977: 151)。
- (6) ソローキンは数奇な運命を持つ社会学者であった。彼は北ロシアの片田舎に生まれた。彼は誕生後すぐ母親をなくし、11 歳のとき父とも別れ、15 歳の兄とともに遍歴職人として生活する。彼はその後、紆余曲折をへてペテルスブルクに出てくることになる。ソローキンは反皇帝運動で、政府に 3 度逮捕される。2 月革命後、今度はレーニンの勢力と激しく対立する。ソローキンは 10 月革命後、投獄され死刑を宣告される。しかしレーニンの直接の指示による釈放後、ベトログラド大学の最初の社会学教授に就任する。しかし彼はまたしても逮捕され、国外追放となる。アメリカに来てからは、ミネソタ大学で研究を進めていた。そして、シカゴの社会学に対抗するために、ハーヴァード大学に招かれることになる。シカゴ大学がソローキんにきびしい立場をとることは当然のこととしても、かれが拠点としたはずのハーヴァードでもパーソンズたちと激しく対立した。この点については、大矢根淳訳に付けられた藤田の解説を参照されたい。(Sorokin, 1942=1998)
- (7) ここで、都市社会学が Sociology of City としてではなく、Urban Sociology として成立したことの意味を考えてみたい。都市社会学は Urban Sociology の翻訳である。urban は形容詞であるので、正確には、都市「的」社会学という意味になる。したがって、語法からすると、都市社会学なら City Sociology か Sociology of

City となるであろう。しかし City Sociology か Sociology of City の用語をみることはほとんどない。Urban Sociology の前身をなすゲデスの都市社会学も Civic Sociology であって、City Sociology や Sociology of City ではない。では、なぜ、都市社会学は Urban Sociology として成立し、City Sociology や Sociology of City として成立しなかったのだろうか。

ここで注目すべきは City の語になぜ形容詞がないのかということであろう。City という語は何よりも自治体としての法的資格を表している。したがって、City という資格は付与されているか、いないのかの二つにひとつであって、中間というものは想定しにくい。人口が少ない集落でも、City という資格が与えられれば、City であるし、いかに人口が多い巨大な集落でも、法的資格を与えられなければ、City ではない。イギリスではマンチェスターが大集落に成長してもいつまでも City の資格をもっていなかった。

当時必要とされた社会学研究は、都市の大集落との関連で分析する社会学研究であって、自治体との関連で分析する社会学ではなかった。City Sociology や Sociology of City といったのでは、どうしても City という自治体組織の社会学研究という意味合いが強くなる。そこで、人口や集落の規模や密度との関連をとらえることばとして、Urban がもちいられる。その Urban Sociology とは、ゲデスやズェプリンらの Civics や Civic Sociology とは区別された科学的な社会学的研究を意味したのである。こうして成立した Urban Sociology が、日本語では都市「的」社会学ではなく、都市社会学とよばれているのである (藤田; 1984b)。

- (8) ギデンスは都市社会学をたんに社会学の数多くある分野のひとつと見なすのではなく、近現代社会を理解する試みとしての社会学の「本質」をかたちづくる主要な要素とみなす必要があるという。近現代のアーバンイズムはたとえ都市区域が伝統的都市の所在した場所やその周辺で発達していった場合でさえ、伝統的都市の示す特質の拡大ではない。近現代のアーバンイズムは「創出環境」を形成しており、そうした「創出環境」は、たんに資本主義的工業生産組織だけでなく、国民国家の領土権にとっても、その背後事情となっている。都市の城壁が時代遅れのものとなったことは、国民国家という新たな管理空間の出現を象徴すると同時に、その出現にかなりの程度かかわっていた (Giddens, 1985=1999: 173)。
- (9) 奥井は最初から都市社会学の創出を意識していたわけではない。奥井は都市研究を進めるなかで、都市経済に「政治」と「建築」を加え、それを一般化するなかで都市社会学を構想していた。
- (10) そこでの都市社会学の危機は都市社会学の認識論的危機であり、ユーロ・マルクス主義のいう都市社会学の危機とはまったく無関係ではないにしても異なっている。そこでの危機とは、都市の社会現象を都市の物理的、人口的特徴から説明するのではなく、都市の社会現象を他の要因に説明を求めようとすることを意味する。そこにあるのは、都市の社会学的研究であっても都市社会学という特定の学問分野の研究ではないということである。都市の社会学的研究ということになれば、どんな調査研究も程度の差はあれすべて都市の社会学的研究であった。なぜならいかなる社会現象も地表で起こっている以上、都市が農村かのいずれかで生じているからである。(高橋; 1975, 藤田; 1976)。しかしこの都市社会学の危機の議論は、ユーロ・マルクス主義のいう都市社会学の危機の議論のなかで、かき消されてしまった。

引用文献

- Abrams, Philip, 1968, *The Origins of British Sociology: 1843-1914*, The University of Chicago Press, Chicago
- Alihan, Mila, 1938, *Social Ecology: A Critical Analysis*, Columbia University Press.
- 秋元律郎, 1989, 『都市社会学の源流』有斐閣
- 秋元律郎, 2001, 『初期シカゴ学派とハル・ハウス』『人間関係学研究』2 大妻女子大学
- Bell, Colin, & Howard Newby, *Community Studies*, George Allen & Unwin.
- Bernard, Jessie, *The Sociology of Community*, 1978, Scott, Foresman and Company, Glenview, Illinois. (正岡寛司監訳, 1978, 『コミュニティ論批判』早稲田大学出版部)
- Boardman, Philip, 1978, *The Worlds of Patrick Geddes Biologist, Town Planner Rre-educator, Pease Warrior*, Routledge and Kegan Paul.
- Bowley, A. L., & Burnet-Hurst A. R., 1915, *Livelihood and Poverty*, London G. Bell and Sons. (友枝敏雄・速水聖子・土井文博訳, 2001, 『計量社会学の誕生』文化書房博文社)
- Bowley, A. L., & Hogg, M. H., 1925, *Has Poverty Diminished?* P. G. King and Sons. (友枝敏雄・速水聖子・土井文博訳, 2001, 『計量社会学の誕生』文化書房博文社)
- Burgess, E. W. & D. J. Bogue (eds), 1964, *Contribution to Urban Sociology*, University of Chicago Press.
- Bulmer, Martin, 1984, *The Chicago School of Sociology: Institutionalization, Diversity, and the Rise of Sociological Research*, The University of Chicago Press.
- Collins, Randall, 1994, *Four Sociological Traditions*, Oxford University Press. 友枝敏雄訳者代表, 1994, 『社会学の歴史』有斐閣
- Coser, Lewis A., 1978, *American Trends*, Tom Bottomore and Robert Nisbet (eds.), *A History of Sociological Analysis*, Basic Books, 1978. (磯部卓三訳, 1981, 『アメリカ社会学の形成』アカデミア出版会)
- Dickinson, Robert E., 1964, *City and Region: A Geographical Interpretation*, Routledge & Kegan Paul, London. (木内信蔵・矢崎武夫抄訳, 1978, 『都市と広域』鹿島出版会)
- Faris, R. E. L., 1967, *Chicago Sociology: 1920-1932*, University of Chicago Press. (奥田道大・広田康生訳, 1990, 『シカゴ・ソシオロジー 1920-1932』ハーベスト社)
- Fischer, C., 1975, Toward a Substructural Theory of Urbanism, *American Journal of Sociology*, Vol. 80. (奥田道大・広田康生訳, 1983, 『アーバンイズム論の下位文化論に向けて』『都市の理論のために』多賀出版)
- Fischer, Claude S., 1984, *Urban Experience*, Harcourt Brace & Company. (松本 康・前田尚子訳, 1996, 『都市的体験』未来社)
- Firey, Walter, 1947, *Land Use in Central Boston*, Harvard University Press
- Fuhrman, Ellsworth R., 1980, *The Sociology of Knowledge in America: 1883-1915*, University Press of Virginia, Charlottesville, 1980.
- 藤田弘夫, 1976, 『比較都市社会学と M. ウェーバーの都市論』藤田弘夫, 1982, 『日本都市の社会学的特質』時潮社
- 藤田弘夫, 1976, 『都市社会学の理論的課題—都市社会学の理論的危機に関する考察—』『社会学評論』第 27 巻 1 号, 藤田弘夫, 1990, 『都市と国家』ミネルヴァ書房
- 藤田弘夫, 1978, 『社会思想としてのアメリカ都市社会学—『アメリカ都市研究』の知識社会学的研究』, 藤田弘夫, 1982, 『日本都市の社会学的特質』時潮社
- 藤田弘夫, 1980, 『地理学方法論の社会科学的基礎—地理学における理論構成と概念構成—』藤田弘夫, 1982, 『日本都市の社会学的特質』時潮社
- 藤田弘夫, 1984a, 『1920 年代のアメリカ社会学の動向』『日本社会学史学会年報』第 6 号, 藤田弘夫, 1990, 『都市と国家』ミネルヴァ書房
- 藤田弘夫, 1984b, 『Urban Sociology を通じて見た都市と国家の関係』『社会学評論』第 34 巻第 4 号, 藤田弘夫, 1990, 『都市と国家』ミネルヴァ書房
- Gans, Herbert, (ed.), 1990, *Sociology in America*, London, Sage Publication.
- Geddes, Patrick, 1915 (1968), *Cities in Evolution*, Ernest Benn Limited. (西村一朗他訳, 1982, 『進化する都市』鹿島出版会)
- Giddens, Anthony, 1984, *The Construction of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Polity Press.
- Giddens, Anthony, 1985, *Nation-State and the Violence*, Polity Press, Cambridge. (松尾精文・木幡正敏訳, 1999, 『国民国家と暴力』而立書房)
- Giddens, Anthony, 1987, *Social Theory and Modern Sociology*, Polity Press, Cambridge. (藤田弘夫監訳, 1998, 『社会理論と現代社会学』青木書店)
- Harvey, D., 1989, *The Condition of Postmodernity*, Basil Blackwell Oxford. (吉原直樹訳, 1999, 『ポスト・モダンティの条件』青木書店)
- Hawley, A., 1950, *Human Ecology*, Prentice-Hall.
- Hawley, A., 1971, *Urban Society: An ecological Approach*, The Ronald Press. (矢崎武夫監訳, 1980, 『都市社会の人間生態学』時潮社)
- Howard, Ebenezer, 1898, *Garden Cities of To-morrow*. (長素連訳, 1973, 『明日の田園都市』鹿島出版会)
- 磯村英一, 1977, 『戦前の都市研究』『社会学評論』第 28 巻第 2 号
- 磯村英一, 1989, 『都市論集』全 3 巻有斐閣
- 柏岡富英, 1995, 『戦後アメリカ社会学(盛)衰史』『奈良女子大学社会学論集』2 号
- 加藤泰史, 2001, 『18 世紀ドイツの大学改革』伊原 弘・小島 毅『知識人の諸相』勉誠社
- 川合隆男・清水洋行, 1994, 『社会学史資料—磯村英一『法学研究』慶應義塾大学第 67 巻第 6 号
- 川合隆男・藤田弘夫編, 1999, 『大都市論と生活論の祖型—奥井復太郎の研究』慶應義塾大学出版会
- 川合隆男, 2001, 『近代日本社会学史研究の展開と可能性』『法学研究』慶應義塾大学
- 鎌田大資, 1997, 『AJS から見たシカゴの社会学者』宝月誠・中野正大編, 1997, 『シカゴ社会学の研究』恒星社厚生閣
- Kitchen, Paddy, 1975, *A Most Unsettling Person: An Introduction to the Ideas and Life of Patrick Geddes*. Victor Gollancz Ltd.
- Lefebvre, H., 1968, *Le Droit a la ville, Anthrops*. (森本和夫訳, 1969, 『都市への権利』筑摩書房)
- Lefebvre, H., 1970, *La Révolution urbaine*, Gallimard. (今井成美訳, 1974, 『都市革命』晶文社)
- Mairet, Philip, 1957, *Pioneer of Sociology: the Life and Letters of Patrick Geddes*, Lund Humphries London.
- Mannheim, Karl, 1932, Book Reviews: Methods in Social Science by Stuart A. Rice, *American Journal of Sociology*, Vol. 38, Sept., 1932.
- 松本 康, 2002, 『ネオ・シカゴ学派』の都市社会学』『社会学史研究』第 24 号
- Matthews, Fred H., 1977, *Quest for an American Sociology:*

- Robert E. Park and Chicago School, McGill-Queen's University.
- McKenzie, R. D., 1968, *On Human Ecology*, University of Chicago Press.
- Meller, Heren, 1990, *Patrick Geddes: Social Evolutionist and City Planner*, Routledge & Kegan Paul London.
- Merton, Robert K. 1957, *Social Theory and Social Structure*, Glencoe, Ill., Free Press. (森東吾他訳, 1961, 『社会学理論社会構造』みすず書房)
- Mingione, Enzo, 1977, *Social Conflict and the City*, Basil Blackwell, (藤田弘夫訳, 1985, 『都市と社会紛争』新泉社)
- Mumford, Lewis, 1938, *The Culture of Cities*, Harcourt Brace Janovich., N. Y. (生田勉訳, 1974, 『都市の文化』鹿島出版会)
- Mumford, Lewis, 1961, *The City in History*, Harcourt Brace & World, Inc., N. Y. (生田勉訳, 1969, 『歴史の都市・明日の都市』新潮社)
- 内藤辰美, 2001, 『地域再生の思想と方法』恒星社厚生閣
- 日本都市学会編 1975, 奥井復太郎『都市の精神—生活論的視点—』日本放送協会出版部
- 内務省地方局有志, 1980, 『田園都市と日本人』講談社
- Novak, Jr. Frank G. (ed), *Lewis Mumford and Patrick Geddes*, Routledge, London, 1995
- 奥井復太郎, 1940 (1985 復刻版・1998 著作集), 『現代大都市論』有斐閣
- 奥井復太郎, 1940 (1998 著作集), 『国土計画論』慶應出版社
- 『奥井復太郎著作集』第 6 巻 大空社
- 奥井復太郎, 1943 (1998 著作集), 『集団住宅論』奥井復太郎著作集』第 6 巻 大空社
- Park, R. E., 1952, *Human Communities*, The Free Press.
- Park, R. E. & E. W. Burgess, 1969, *Introduction to the Science of Sociology*, University of Chicago Press.
- Pickvance, C. G. ed, 1976, *Urban Sociology: Critical Essays*, Methuen. (山田 操・吉原直樹・鯉坂 学訳, 1982, 『都市社会学』恒星社厚生閣)
- Quinn, James A., 1950, *Human Ecology*, Arcon Books.
- Reiss, Albert J., 1957, *The Sociology of Urban Life: 1945-1956*, P. K. Hatt & A. J. Reiss (eds), *Cities and Societies*, The Free Press.
- Reissman, Leonard, 1964, *The Urban Process: Industrial Societies*, The Free Press. (星野郁美訳, 1971, 『新しい都市理論』鹿島出版会)
- Redfield, Robert, 1941, *The Folk Culture of Yukatan*, The University of Chicago Press.
- 佐藤俊一, 1988, 『現代都市政治理論』三嶺書房
- Savage, Mike and Alan Warde, 1993, *Urban Sociology, Capitalism, and Modernity*, Macmillan Press Ltd.
- Schad Sumanne, Petra, *Empirical Social Research in West-Germany*, Mouton de Gruyter, Berlin, 1972. (川合隆男・大淵英雄監訳, 1987, 『ドイツ・ワイマール期の社会調査』慶應通信)
- 新明正道, 1985, 『わが国都市社会学の動向』『新明正道著作集』第 10 巻 誠心書房
- Sjoberg, Gideon, 1959, *Comparative Urban Sociology*, Merton, R. K., L. Broom & L. S. Cottrell Jr. (eds.), *Sociology Today*, Harper & Row, N. Y., Vol. 2.
- Sjoberg, Gideon, 1960, *The Preindustrial City: The Past and Present*, The Free Press, N. Y. (倉沢 進訳, 1968, 『前産業都市』鹿島出版会)
- Sjoberg, Gideon, 1965, *Theory and Research in Urban Sociology*, P. M. Hauser & L. F. Schnore (eds.), *The Study of Urbanization*, John Wiley & Sons.
- Southhall, A. (ed.), 1973, *Urban Anthropology*, Oxford University Press.
- 鈴木栄太郎, 1969, 『都市社会学原理』未来社
- Simmel, Georg, 1903, *Die Großstädte und Geistesleben, Jahrbuch der Geisteswissenschaft*, IX. (居安 正訳, 1978, 『大都市と精神生活』ジメル著作集第 12 巻白水社)
- Small, A. W., 1896, *The Era of Sociology, The American Journal of Sociology*, Vol I, Number 1.
- Sorokin, P. A., & C. C. Zimmerman, 1929, *Principles of Rural-Urban Sociology*, (吉野正樹抄訳, 1940 (1987 復刻版), 『都市と農村』巖南堂)
- Sorokin, P., 1942, *Man and Society in Calamity*, Dutton, (大矢根淳抄訳, 1998, 『災害における人と社会』文化書房博文社)
- Sorre, Max, 1957, *Recontres de la Géographe et de la Sociologie*, Marcel Revière. (松田信訳, 1968, 『地理学と社会学の接点』大明堂)
- 高橋勇悦, 1975, 『都市化社会の社会学—都市社会学の危機と再生—』『社会学評論』第 25 巻第 4 号
- Tilly, Charles, 1968, *The Form of Urbanization*, Parsons, Talcott (ed), *American Sociology, Perspective, Problems, Methods*, New York, Basic Book, Inc. (東北社会学研究会訳, 1969, 『現代のアメリカ社会学』誠信書房)
- 東京市政調査会編, 1923, 『ピアード博士講演集』東京市政調査会
- Allen Tullos, 1990, *The Politics of Regional Development: Lewis Mumford and Howard W. Odum*, in Thomas P. & Agatha C. Hughes, *Lewis Mumford: The Public Intellectual*, New York, Oxford University Press.
- 宇賀 博, 1976, 『『社会科学』から社会学へ』恒星社厚生閣
- Wallerstein, Immanuel, 1991, *Unthinking Social Science: The Limit of Nineteenth-Century Paradigms*. (本田健吉・高橋 章訳, 1995, 『脱=社会科学』藤原書店)
- 和崎春日, 1985, 『現代都市と都市人類学の展開』藤田弘夫・吉原直樹編, 1985, 『都市—社会学と人類学からのアプローチ』ミネルヴァ書房
- Weber, Max, 1972, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 5A. J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen. (世良晃志郎訳, 1974, 『都市の類型学』創文社)
- Williams, Raymond, 1976, *Keywords: a Vocabulary of Culture and Society*, William Collins Sons & Co., Ltd London. (岡崎康一訳, 1980, 『キーワード辞典』)
- Wirth, Louis, 1964, *On Cities and Social Life*, Chicago University Press
- 矢崎武夫, 1962, 『日本都市の発展過程』弘文堂
- 矢崎武夫, 1963, 『日本都市の社会学理論』学陽書房
- Yazaki, Takeo, 1968, *Social Change and the City in Japan*, Japan Publishing Inc., Tokyo.
- 吉原直樹, 1994, 『都市空間の社会学理論』東京大学出版会
- 吉原直樹, 2002, 『都市とモダニティの理論』東京大学出版会
- 山岸 健, 1977, 『戦前の都市研究』『社会学評論』第 28 巻第 2 号
- Zueblin, Charles, 1899, *The World's First Sociological Laboratory, The American Journal of Sociology*, Vol. IV, Number 5.